〈月岡城跡を探訪する会〉　　2022.04.09(土)

三条市本成寺地区の山城について

鳴海　忠夫

1　はじめに

三条市本成寺地区は、守門岳・粟ヶ岳に源を発し、下田地区を貫流して三条市街地で信濃川に合流する五十嵐川の南に位置する。当地区は五十嵐川の南にあるので嵐南地方とも呼ばれ、中世には大面荘に属していた。

これまで、本成寺地区の丘陵上には如法寺城跡など、いくつかの山城跡が確認されている。これについては、伊藤正一氏が『三条市史』上巻（三条市　1983）で詳しく紹介している。筆者は先学の尊い研究に導かれながら、10数年前に本成寺地区の山城の調査を実施したので、その概要を城の縄張りを中心に報告するものである。

2　本成寺地区の山城

(1) 如法寺城跡　（略）

(2) 長嶺城跡　　（略）

(3) 月岡城跡

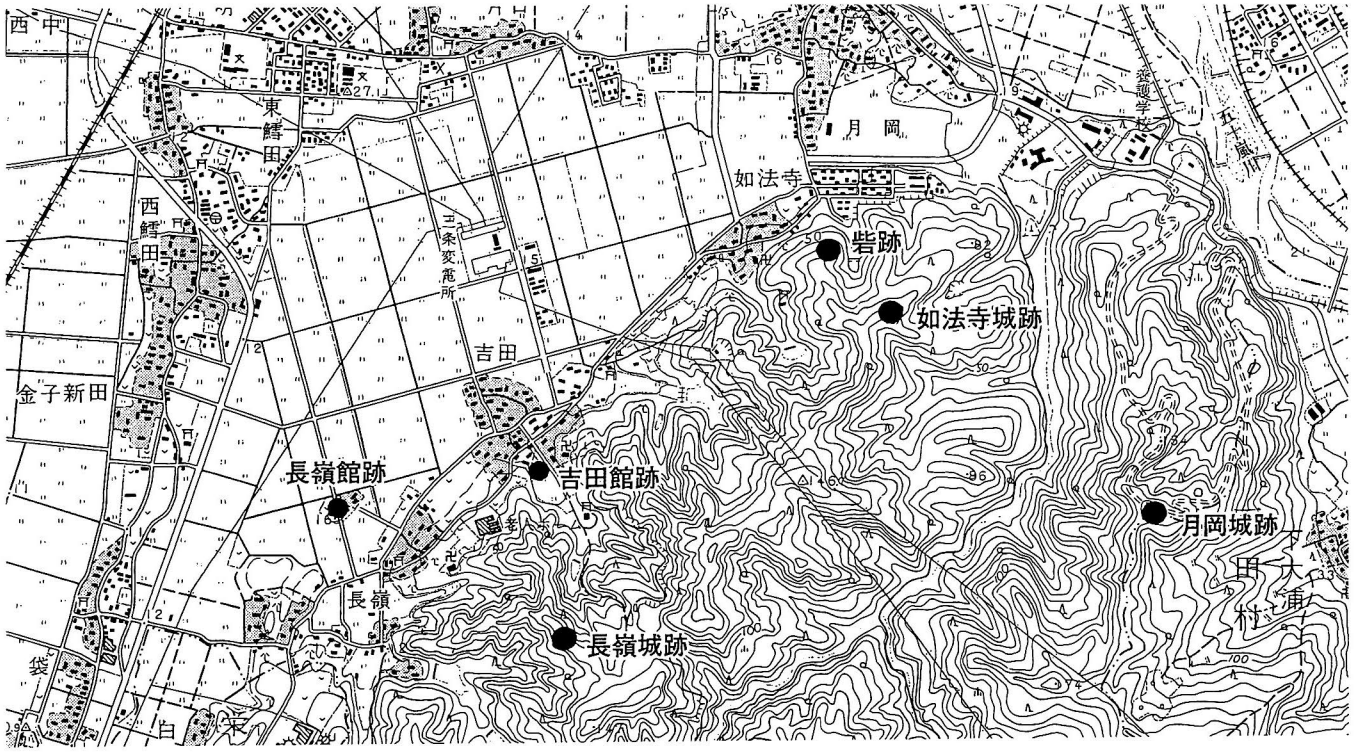
月岡城跡は、三条市月岡字桜山他に所在する。東半は下大浦集落の地籍である。本城跡は月岡集落の南南東約1.5km、標高 170mの尾根上に立地する。昭和40年代後半からの林道工事は、城跡内を通過して開かれたため、曲輪や堀切の一部が失われてしまった。

月岡城は小形の山城で、尾根頂部の曲輪Ⅰを中心として、ここから南北と東側へ下る尾根上に曲輪や土塁、堀切、虎口などを構える。城域は 280×170mである。

曲輪Ⅰは32×30mを測る比較的大形の曲輪で、実城に比定される空間である。内部を1mほどの切岸で三区画とし、北側に虎口を構える。該曲輪から北側へ下る尾根上には、底幅約4mの箱堀状の堀切を掘り込み、当該尾根からの敵の侵入に備えていた。この堀切は西半が林道工事で埋められたため、現況は竪堀状となっているが、かつては尾根を断ち切っていたものと推定される。

曲輪Ⅰの西側斜面には長さ約15mの竪堀、東側へ下る尾根上には曲輪Ⅱ・曲輪Ⅲなどの腰曲輪群を配置する。曲輪Ⅱは36×10mを測り、ほぼ中央部に虎口を構え、そこから城道が下大浦集落へ下るので、ここが大手とも考えられる。曲輪Ⅲは45×10mを測るが、曲輪の上面は不整地で東側へ緩やかに傾斜する。

曲輪Ⅰの南側に配置された曲輪群は、林道が曲輪内を通過したため、大きく破壊されてしまった。２条の堀切も埋められたため、現況では微かに堀切と確かめられる程度である。曲輪Ⅳは60×8mを測る腰曲輪である。曲輪Ⅴは30×15mを測り、曲輪内に円形状の土坑がある。



第１図　本成寺地区の山城位置図（国土地理院「三条」1/25,000）

3　まとめ

これまで、本成寺地区に所在する如法寺城と長嶺城、月岡城について、城の縄張りを中心に報告した。三つの山城は、その縄張りから戦国時代の山城と把握される。いずれも在地領主保持の要害と考えられるが、月岡城だけが地誌に伝承が採録されているだけで、城の歴史などに関わる文献史料がないため、実態は明らかでない。

また、三つの山城とも集落境にあり、城名は一方の集落名を冠している。山城と関係した集落は、城名と同じ集落と考えられているが、城の縄張り、とくに虎口・桝形施設の配置状況から、若干の疑問が生じた次第である。

したがって、まず初めに特徴的な遺構などから普請の年代、次に山城と集落との位置的な関係や虎口・桝形施設の配置状況などから、城と対応した集落を検討してまとめとしたい。

(1) 遺構の特色と年代

如法寺、長嶺城　(略)

月岡城は曲輪Ⅰを頂点として、南北と東側に延びた尾根に曲輪群を配置するが、曲輪の配置は尾根線に限られている。腰曲輪の配置も緩慢である。堀切・竪堀は大形化せず、それほど防禦性に富んでいない。虎口施設は平入りの虎口で、特徴的なものはない。

本城は林道開削に伴って、遺構の多くが破壊されているので、明確な年代を判断するのはむずかしいが、天文年間もしくはそれ以前の普請と推定される。

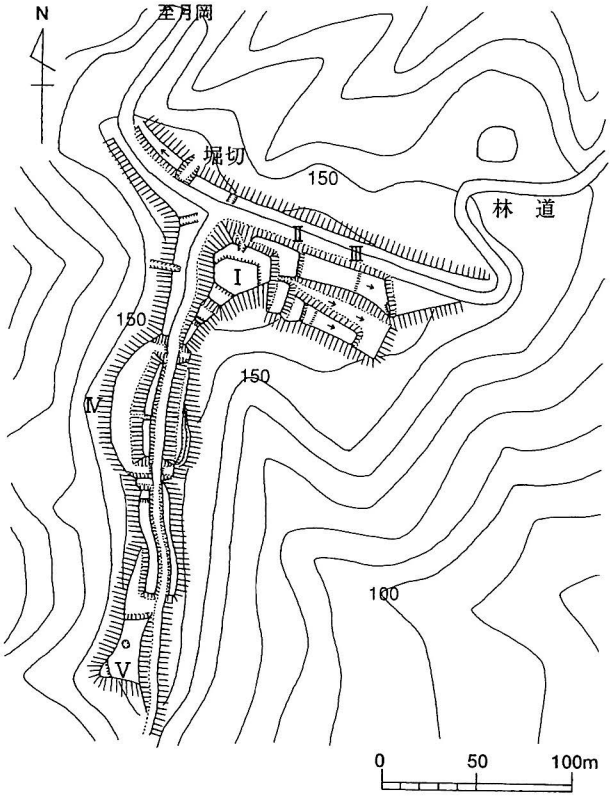
(注:天文年間〈1532～1555)

(2) 山城と集落の関係

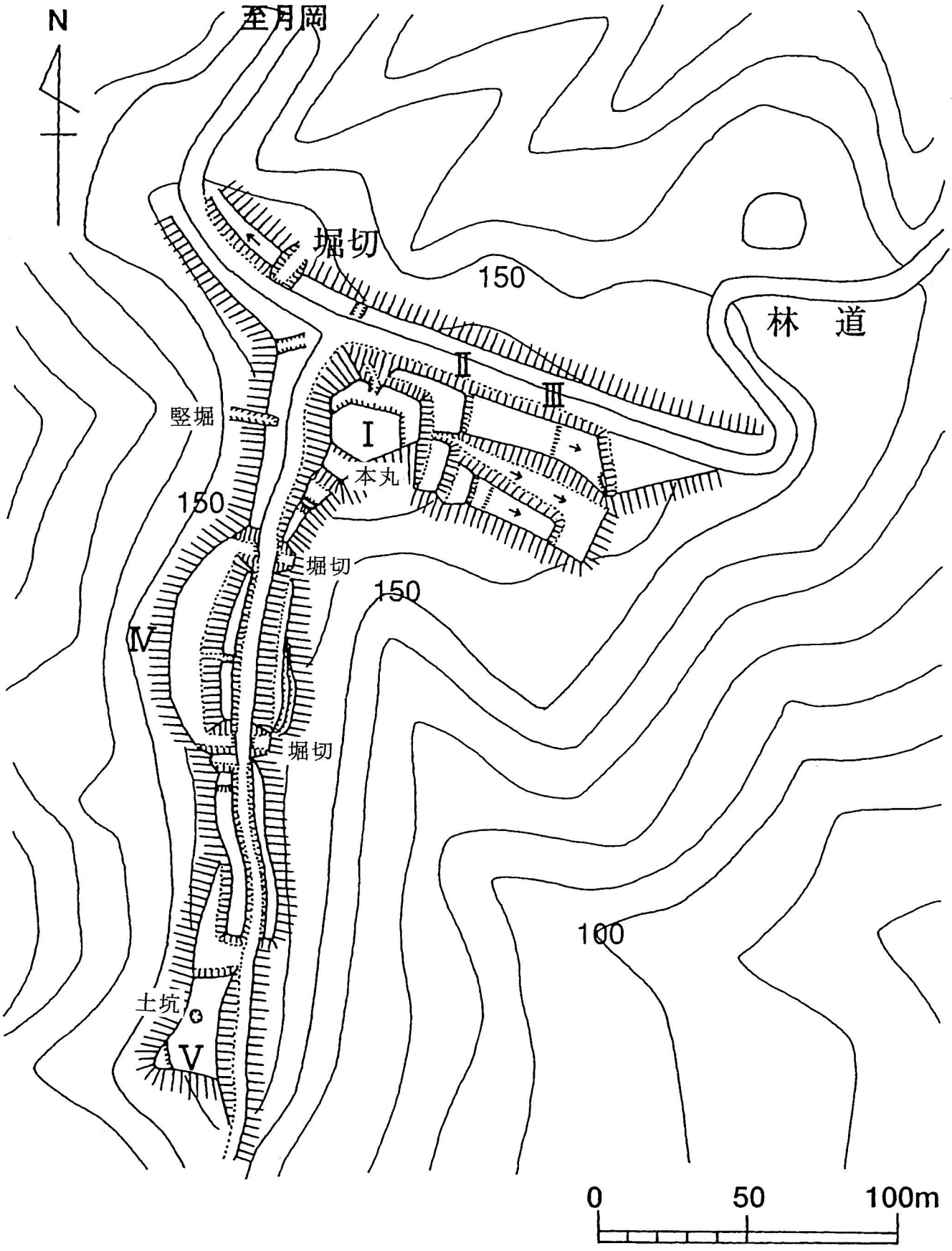
如法寺、長嶺城　(略)

月岡城は月岡と下大浦の境にある。月岡から城までは約 1.5kmと離れているが、下大浦からは約500mと近接する。月岡から城へは、谷を通って城の西側へ一気に上がるのが最短コースであるが、ここからの道はない。一方、下大浦から城へは、城道らしき山道が曲輪Ⅱの虎口へ通じているので、容易に行くことができる。

以上の検討結果から、現時点では如法寺城と月岡集落、如法寺城の砦と如法寺集落、長嶺城と長嶺集落、月岡城と下大浦集落が山城と対応した集落と考えているが、あくまでも仮説であって断定できるものではない。



第4図　月岡城の縄張り図



月岡城の縄張り図